

「高井」第六十四号別刷

栗林遺跡第五・六次発掘調査

中野市教育委員会



を検討して、その他のグリットは約五〇cm表土を除いた。その結果、 $A_0$ — $F_4$ 、 $A_1$ — $F_4$ のグリットに遺物を認め、こゝを重点に精査する事とした、また $D_3$ グリットを中心に土板状の落ち込みが認められたが、調査が進展するに従って井戸状の遺構となった。また土器片は $A_3$ 、 $A_4$ グリット附近に濃厚な出土が見られたが、個体として確認出来る状態になく、栗林一式土器から、箱清水式土器片まで混在し

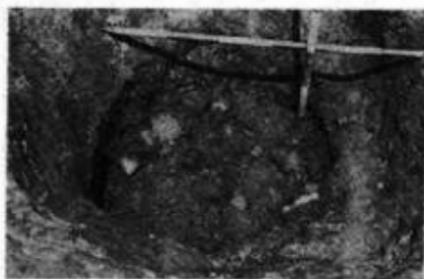
た状態で発見されたが、主体と考えられる土器片は百瀬式併行土器で（栗林四類土器、田川・中野市誌）あった。土器片の下からは遺構などは確認出来なかつた。また調査出来なかつた部分は宅地造成で、前面の道路と均平な埋立工事施工されるので、遺構が保存される状態にある事を附記する。

井戸状遺構



第3図 井戸状遺構実測図

本址は礎石面において一・九五m×二・三mの楕円形の平面で、底部に円形に近く、直径は〇・五m内外である。断面形状は深鉢形で、深さは、遺構確認面より、約一・七m、表土面より約二・五mである。中途に五段の足がかりと思われる段を有し、最下の段はやゝ広くて足がかりが充分出来る状態を示す。遺構面より一・五m下までは、黄褐色混入土層で以下底部まで黒色の泥状粘土で、遺物は、全体に包含されていたが、特に底部より、〇・三m附近に多く発見され、底の部分より腐状の有機物が土に密着して残存したが、取上げ保存する事は不可能であった。特に底部の土は粘質が強く感じられた。七月の時点で掘水面は深さ〇・三mで汲みあげても一晩で元の位置に回復していた。湯水期には常用として使用出来るか疑問で、五四年の確

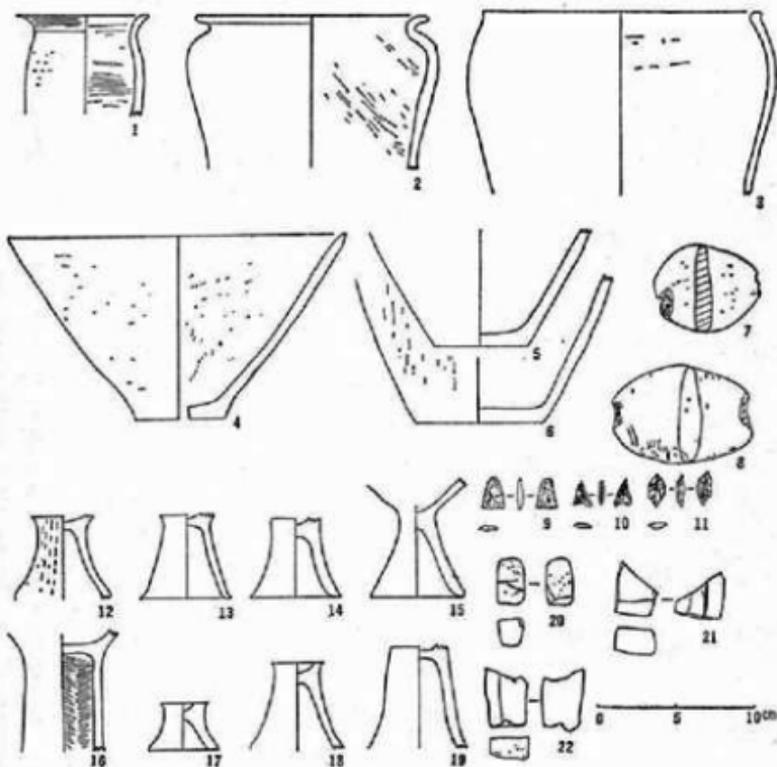


第4図 井戸状遺構から遺物の出土状態

調査の井戸、附近の井戸を見ると五〜六  
 mの深さは必要のようである。こうして考  
 えると一種の貯蔵穴とも考えられるが現時  
 点では、この外の傍証資料もなく、井戸状  
 遺構として報告しておく、また掘削され廃  
 棄された時期は、底部附近より発見された  
 塗彩された高杯の脚部や、甗の型應より箱  
 清水式文化の時期と推定される。  
 遺物

井戸状遺構出土品(第4図)

〔高杯〕12—19、16が井戸上層部より検出



第5図 遺物実測図

されたのみで17-19は、深さ二・一m附近、12-15は深さ二・三七m附近より検出された。13・15・16・18は胴部内部までも赤色重彩される。14・17・19は器面が剝離され詳細不明である。この中には、台付甕の下部と疑われるものもある。これらは弥生式文化中期最終末の百瀬式期から後期箱清水式期に編年されよう。

〔甕〕4 深さ二・五七m附近より発見されたもので内外面に剝離痕が見られ、煤状の附着があり、胎土には砂粒がやや多く認められる。

〔甕〕2・3は深さ二・三七m、6は深さ二・六mの出土で2は折返し口縁が僅かにあり、口唇部に、LR縄文を摩擦して胴部には斜状に平行柳葉文が僅かに残っている。3は折返し口縁の無いもので、6は菱形土器の下半部で内面は煤状の附着がある。2は栗林Ⅱ式、その他は箱清水期に相当しよう。

土器では中形の閃緑岩の始刃石斧の頭部が深さ二・三七mより出土した。頭部が使用されて一部剝離された後、磨きなおしてある。8の石重は深さ一・六五cmの出土、21の砥石は井戸上層の検出である。

#### グリット出土品

1は小形菱形土器でA<sub>3</sub>より、5はC<sub>4</sub>より発見された砂粒の多い下腹部のみの土器、7の石重はB<sub>2</sub>、20は砥石でA<sub>3</sub>、22の砥石はH<sub>1</sub>から検出された。石鏡9は蛋白石で快入部のない薄い作りで、10は黒曜石製、11は安山岩製の粗製の有柄鍔である。

その他図示しなかった土器では、中形の始刃石斧がB<sub>2</sub>とC<sub>4</sub>から

出土した兩者とも頭部破片で折損面が斜状を呈し、井戸状遺構出土品の輪切状折損形と分類される。また先端部両面に使用痕のある円礫石、扁平楕円な川原石の凹石など検出されたが、量的に注目されるのは安山岩の扁平で厚さ三mm以下で大きさが一〇—一五mm内外の打裂痕のある石中には火熱をうけているものも存在する。(今回十個検出)

これは第一次発掘以来、注目されているが、文化の所屬、使用目的など、究明されていない。

#### 出土土器片

井戸遺構出土は4・10-12・14-29でグリット出土は1A<sub>3</sub>・2B<sub>3</sub>・3 32 33 4C<sub>4</sub>・5 6 30 31 D<sub>4</sub>・13 E<sub>4</sub>のグリット出土である。寫真文



第6圖 土器拓影圖

は太形と細形があり、磨消縄文LRを伴うもの(2・5・13・14)と  
 縄縞文を伴うもの(198)山形溝にえがかれたもの(23・25)など  
 がある。縄縞文の系統は16—21・26—31・33・34で34は二単位の線書  
 き縄縞文A、七単位の線書される20・25などは縄縞文Bで波状文16・17  
 20・30・平行文26など、ボタン状貼付文あるもの4・11・21、断絶痕のあ  
 るもの30、刺突文あるもの33・34などで栗林I式土器に伴うものが多  
 く図示したが、前にも触れた如く、今回出土土器の主体は百瀬式併  
 行土器、続いて箱清水式土器片であったことを附記する。

むすび

今回の発掘調査について簡単に所見を述べると、遺構・遺物のあ  
 り方が二次的作用をうけて良好な出土状態を示さず、第三次発掘に  
 於いても同様な結果がみられる。これらは遺跡の立地が、古代から  
 人類をはぐくんだ母なる川、千曲川沿岸に所在する為、各時代の人  
 々の往来、居住する結果に起因する部分と自然の力の相乗作用がし  
 からむる結果と思われる。北信の弥生中期後半に位置づけられる。  
 当遺跡では現時点に於いて、I式土器には縄縞文土器と縄文晩期電  
 ケ岡文化圏の所産の筥がきの磨消縄文土器が伴出し、これ以前の様  
 相を示す、良好な遺物、遺構は検出されておらず、千曲川旧河川に  
 沿って一五〇〇mに及ぶ広い遺跡に今後の調査が期待される。

注1 林茂街・金井段次・岡原隆、「長野県中野市栗林遺跡第三次調査概  
 報」信濃18—4昭41 中野市教委「栗林遺跡発掘緊急調査報告書」昭  
 56など参照

2 注1の前掲論文

調査関係者

責任者 中野市教育長 菅沼利男

調査主任 榎原長則

市教委 土屋 輝太郎

藤沢 義義雄

岩戸 啓一

調査員 池田 実男

調査補助員 小林 軍司

割田 市太郎

海野 福松

小野沢 京二

下田 由人

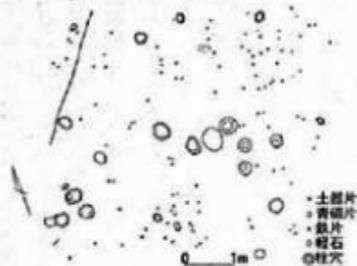
多大な協力をいただいた地主小林次郎氏に末筆ながら深く感謝申  
 上げます。(榎原長則)

二、第六次発掘調査

はじめに

今回は昭和五十六年二月一八日—二〇日の間、中野市栗林四四一  
 ノ一四番地、大俣の浅沼光義氏の所有地の家屋新築の為に第六次  
 緊急発掘調査を行なった。初冬ではあったが幸い好天に恵まれ、調  
 査が進行した。調査地点は第五次発掘地点のすぐ西隣りで、その調  
 査との関連の発見が期待されたが、あまり成果はなく終わった。

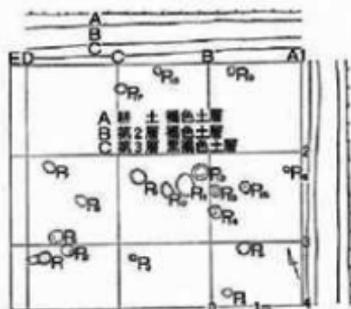
遺構



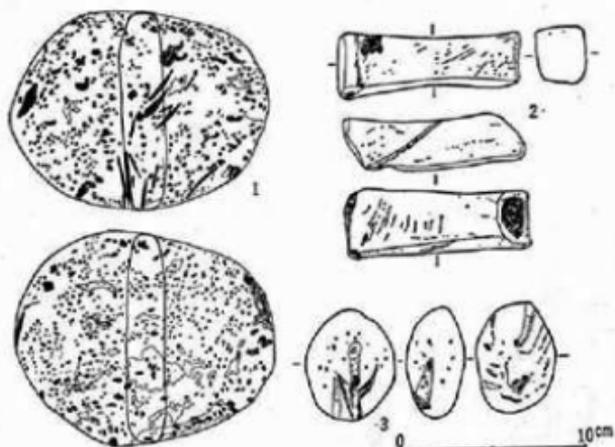
第8圖遺 跡



第7圖 附近測量圖



第9圖柱 穴



第10圖石 製品

六・三五 $\times$ 五・四五 $\times$ の小面積の発掘で地下〇・五 $\times$ 附近より、遺物の発見があり、柱穴と思われるものが一九箇所発見されたが、建物址として確認する迄には至らなかった。

#### 遺物

栗林I式土器片から、箱溝水式土器片まで二二六片、土師片は四片で鬼高期の皿が、器形の判明する唯一の資料である。須恵片一〇個、灰釉是一片、青磁片は三片を数え舶載品と思われるが、折損面は大分磨滅している。鉄片は二片で、五 $\times$ 角の長さ八・八 $\times$ の犬釘状を呈し頭部が欠損しているものと不明鉄片一個である。軽石(第4図3)六 $\times$ 四・四 $\times$ の最大厚さ三・二 $\times$ の楕円形で穴が二個並列にあけられるが片方は宋貫通に終っている。抛石(第4図1)楕円形の安山岩の河原石で先端部に敲いた痕があり、褐色から、黒褐

色で火熱をうけて変質している。磁石(第4図2)検出位置が、表土より三〇 $\times$ の深さで、長さ九・五 $\times$ 、三・ $\times$ 三 $\times$ で重量一八〇 $\times$ で四面とも使用痕があり、や $\times$ 平面なのは一面だけで他は彎曲した状態を示めている。

#### 調査関係者

中野市教委 藤 沢 製波雄

岩 戸 啓 一

小 野 昭 男

中野市文化財保護協力委員 池田 実 男

調査主任 榎 原 長 則

五六年度の報告書の図版作製は、池田実男が当った。遺物と詳細な記録は中野市歴史民俗資料館に保管してある。

(榎原長則)

C

C